

012-25

急性期病棟においてベッドサイドカンファレンスを導入して

石巻赤十字病院 4階東病棟

○稲葉 望、松田 由美、平山真由美、佐々木武志、
新田 聖美

【はじめに】当チームは救急科で頻繁な観察が必要な急性期患者、整形外科疾患では頸髄損傷等の急性期患者を担当している。日々変化する状態を申し送るために時間を要していた。さらにカンファレンスの時間を確保できず、問題点の明確化や必要なケアの統一を図ることが出来ていない現状があった。それらを改善するためにベッドサイドカンファレンスを導入した。取り組み結果および今後の課題について報告する。

【目的】ベッドサイドで情報を共有し患者の現状、問題点、看護介入を検討する。

【方法】深夜看護師は夜間の入院者、容態が不安定な患者、手術後の患者などを選出し、日勤リーダーに伝える。日勤リーダー看護師、深夜看護師を中心に日勤看護師でベッドサイドへ行き、現状把握・問題点看護介入を検討する。日勤看護師はベッドサイドカンファレンスした内容を患者記録に残す。

【結果】ベッドサイドカンファレンスを行った患者は平均4~5名(チーム患者12~14名)/日であり、カンファレンスとして患者記録に記載した。導入後のアンケートの結果では、100%が情報の共有につながった事がわかった。記録に残したことで、ベッドサイドカンファレンスに参加できなかったスタッフでも、現状や問題点を把握することができた。

【考察】急性期患者を看護するにあたり、伝えたい情報が多くなり申し送りに時間を要していた。ベッドサイドカンファレンスを導入することで、チームスタッフが統一して現状や問題点を把握することができた。しかし、カンファレンス内容について患者記録に残したが、実施した結果や看護計画への移行がされておらず、今後はベッドサイドカンファレンスの内容を見直し、患者の問題点から看護計画への移行を含め検討が必要であると考ええる。

012-26

安全に抗がん剤を取り扱うための方策の評価

武蔵野赤十字病院 看護部

○古澤 恭子、西畑 千尋、大山 幸恵、上鶴瀬麻有

目的:平成23年8月に当院における抗がん剤取り扱いの実態調査を行った。その結果から抗がん剤曝露防止策を標準化する必要性を見出し安全に取り扱うための教育とマニュアルを作成した。今回これらの評価を行うためアンケートを行った。

方法:実態調査に協力してもらった看護師155名を対象にアンケートを行った。アンケートには研究目的、研究参加の協力は任意であることを記入し紙面にて同意を得た。

結果:アンケート用紙の回収数は125、そのうち研究同意が得られたのは123で、回収率は79%であった。統一した抗がん剤曝露防止の知識・技術教育を受けた看護師は87%であった。標準化した教育と共に抗がん剤曝露防止のマニュアルを作成した結果、抗がん剤曝露防止策が理解できたと答えた看護師は90%で曝露に対する不安が軽減したと答えた看護師は77%であった。作業ごとの防護具についてはマスクと手袋の着用は89%であった。抗がん剤曝露防止を手順通りに行えない理由として、抗がん剤取り扱いの件数が少ない、多忙なため手順の振り返りができていない、正しい知識が不足しているなどがあった。

考察:標準化した抗がん剤曝露防止の教育とマニュアル作成は、抗がん剤曝露防止についての理解と不安の軽減に効果があったと考える。作業ごとの防護具については、以前はマスクと手袋の着用の割合は80%であったが今回は89%であったことから構築した方策によって効果があったと考える。しかし知識不足や手順通りに行えていない現状もあるため、抗がん剤曝露防止策を推進していくためには年間研修計画やチェックシステムの構築を検討することが必要であると考える。

結論:抗がん剤曝露防止策の標準化は有用であったと考える。今後は推進に向けた教育と技術チェックシステムを構築する。

012-27

ナーシングカート導入による検温時のベッドサイド入力率の向上の取り組み

石巻赤十字病院 看護部

○武山 早苗、阿部 清美

【はじめに】

当院では、電子カルテを導入しているが、紙に書くほうが早い、ノートパソコンを載せるワゴンが足りない、検温表の入力の途中でノートパソコンのバッテリーが切れるなどの理由で、ベッドサイド入力が滞っていた。今回、ベッドサイド入力を向上させる取り組みを行ったので報告する。

【目的】

ベッドサイドで検温表を入力することにより、記録の転記による時間外入力が削減する

【取り組み内容】

現状分析を行い、以下の対策を実施

1. 検温表に一括して入力できるシステムの構築(検温表簡易一括入力方法の説明会開催)
2. ノートパソコンを新規のものに変更(WindowsXPからWindows7)
3. ナーシングカート導入
4. ベッドサイド入力率を調査し、各病棟ヘランキング形式にして報告

【調査方法】

病院情報システムよりデータ収集:「検温実施時間」と「検温表入力時間」の差でベッドサイド入力率を抽出

【結果】新規のパソコンに変更したことにより、検温表入力時のバッテリー切れが解消された。ナーシングカート導入前後で、ベッドサイド入力率は日勤帯37%から67%へ、準夜帯64%から69%、深夜帯50%から64%と変化がみられた。検温表の時間外入力では、日勤帯では11%減少、準夜帯では7%上昇、深夜帯では25%の減少がみられた。

【考察】

今回の取り組みで、ベッドサイド入力率では、各勤務帯の入力率は30%から60%とばらつきがあったが、各勤務とも60%前後まで引き上げることができた。また、記録の時間外入力も減少したことで、ベッドサイド入力の目的達成に近づくことができた。

012-28

人工関節術前処置の業務改善への取り組み

大津赤十字病院 整形外科

○林 優

1. はじめに整形外科では、人工関節の術前に創感染予防を目的に術前処置を行っている。A病院では手術室入室前に消毒用エタノールで患肢を清拭し、滅菌された布で足を覆う方法(以下、足袋処置とする)を行っている。これは下半身を露呈させる方法であり、羞恥心が高い、寒いといった意見があり身体的・精神的に苦痛を伴う。また、約30分の時間と数名の看護師を必要とするため看護師の負担も大きい。そこで、術前処置の簡易化ができ、患者負担が軽減し、エビデンスに基づいた術前処置の検討・実施を目的に業務改善を行った。2. 活動内容足袋処置を受けた患者に感染理解について調査を実施。病棟看護師に足袋の問題点を調査。その後エビデンスに基づく術前処置を検討し、ポビドンヨードを使用した術前処置を実施。これは手術前日の入浴時にポビドンヨードで患肢を消毒し、当日は患部のみ消毒用エタノールで消毒を行いシートで覆う方法(以下ポビドンヨード処置)である。この処置を実施、処置を受けた患者と看護師に調査を実施。3. 結果ポビドンヨード処置後の患者調査より「疼痛・羞恥心がなかった」、「感染予防のため」という処置目的が足袋処置の患者調査より増加。看護師の調査では、「時間短縮し、処置にかかる看護師の人数が軽減できた」、「消毒効果を知り、感染予防の処置であることが明確になった」という意見が聞かれた。4. まとめ今回人工関節術前処置を変更することで患者の負担の軽減、看護師の感染予防における知識の向上ができた。引き続き業務改善につとめたい。また、変更後の術後感染についてデータ収集まではできていないため今後の課題としていきたい。